

イギリスへ渡った茶(11)

富山八十八(とみやま やそや)

ティー・クリッパー・レース

木材の豊富なアメリカでは帆船の大型化が進んだ。イギリスでは櫂材が不足しチーク材、さらには鉄を使った木鉄交造船が造られた。鉄を使う方が重量が軽減できた。汽船は石炭補給が必要で、遠距離の航海には帆船が適していた。

1856年にロンドンの茶商たちは、その年いちばんに新茶をロンドンへ届けた船にトン当たり1ポンドの賞金を払うと発表した。

英米ティー・クリッパーの競争が始まった。だがアメリカ船は南北戦争で姿を消していった。

アヘン戦争の南京条約によって、中国茶の積出港に上海と福州が加ると福州が中心的な積出港となった。

福州は東シナ海からミン江を内陸に入ったところにある。上流には茶産地の武夷があって、4月末から5月初めになると新茶を積んだ小舟が続々と福州に下ってくる。

待ち構えていたティー・クリッパーは昼夜兼行で茶箱を積み込み、われ先にとタグ・ボートに曳かれてミン江を下って外海へ出る。狭く曲がりくねったミン江は汽船でないと順調に航行できない。タグ・ボートには外輪船やスクリュウ船があった。

1860年代にはイギリス中がその年のティー・クリッパーの到着順位を予想して競馬のダービーやテムズ川のボート・レース並に熱中した。

グレート・レース 1866年5月29日福州では早朝から5隻のティー・クリッパーが新茶を満載して次々とタグ・ボートに曳かれミン江を下っていった。5隻の平均トン数は768トン。翌朝、河口から外洋へ出た3隻がほとんど同時に総帆を張って南を目指した。5隻のうち最後の1隻が河口を出たのは翌日の夜だった。南シナ海を南西の季節風に乗って16ノットのス

ピードでジャワ島沖へ、そこから南東貿易風に乗って最高速度でインド洋を一気に突っ切り、喜望峰沖から大西洋へ進む。時には2船が近接して競り合い、時には背後に迫る船影に風を求めて転舵する。

8月4日3隻が赤道を通過、2日遅れて1隻が、6日遅れてまた1隻が通過した。大西洋を一路北上し、イギリス海峡をあらん限りの帆を張ってテムズ河口に達し、錨を下ろしタグ・ボートを待った。9月6日午前8時に1番船がロンドンに、8時10分に2番船が、正午に3番船が、翌日夜に4番船が、その翌朝に5番船が着いた。1番船の船長は1番になったのはタグ・ボートによる僥倖だとして、船長に対する100ポンドの賞金も、積荷に対する賞金も2番船の船長と船員とで折半し、美談として喝采を浴びた。これほど各船が切迫したレースはなく「グレート・ティー・クリッパー・レース」と呼ばれた。

カティー・サーク 1869年11月、最新鋭のティー・クリッパーとして936トンの「カティー・サーク」がスコットランドの造船所で進水した。だが不運にも6日前にスエズ運河が開通した。運河は風を受けてジグザグに走る帆船は航行できず、また距離が喜望峰廻りよりも9000kmも短縮され、汽船の方が優位となったことだった。

1870年2月、カティー・サークは処女航海でロンドンを出港して104日で上海に着き、6月25日早朝、新茶を積んで上海を出港し110日目の10月13日にロンドンに着いた。

茶の運賃は下降の一方で、ティー・クリッパーも減り、1873年には新茶輸送は汽船の時代になっていた。ティー・クリッパーの多くはオーストラリアから羊毛を運ぶウール・クリッパーとなり、カティー・サークもそこで活躍した。現在カティー・サークはテムズ川下流の天

文台で有名なグリニッジに保存されている。

20年間にわたるティークリッパー・レースで帆船は極度に発展し、一方ロンドンの茶の価格も下がっていった。

紅茶の生産—インド紅茶の誕生

18世紀、イギリスの茶の分類で「ブラックティー」とされたものは、現在の完全発酵の「紅茶」ではなく、ウーロン茶のような部分発酵茶だった。イギリス人は部分発酵茶のなかでも発酵度の進んだものを好み、その要望に応じているうちに100%発酵の「紅茶」が生まれたようだ。インドから始まるイギリス人による茶生産は完全発酵の紅茶である。

イギリス国内での茶消費が増え、中国との交易条件が好転せず、中国以外に茶を求める声が高まった。しかし東インド会社は中国茶貿易を独占しているのでこの意見には消極的だった。

19世紀に入るとインド各地に派遣されたイギリス人からカルカッタに、茶を食べたり、飲用している事例が報告されてきた。イギリス東インド会社のブルース大佐は当時ビルマの支配地であったアッサムの丘陵地で自生している茶樹を発見した。

1825年に英国技術協会はイギリス植民地その他で茶の製造に成功した者には賞金を提供すると発表した。

1833年、中国はイギリスとの通商条約延長を拒否したので鎖国するおそれが出てきた。

この深刻な事態に1834年、インド総督ベンティンク卿は中国茶の栽培を研究するティー・コミッティーを設置した。委員のゴードンが茶の栽培と製法、種子と苗木、技術者などをえるために中国へ派遣され、翌年戻ってきた。

コミッティーはアッサムにも調査団を派遣、ブルースの案内で自生している茶樹を見た。

中国でゴードンが入手した茶の種子4万がカルカッタの植物園で苗木に育てられインド各地の政府直轄の実験農場や独立プランター170人に送られたが、おおかたは枯死した。しかし高地の実験農場ではうまく育った。

一方ブルースはアッサムで自生している茶樹を育てることに没頭していた。茶樹がジャングルのなかでよく育っていることから苗木は覆った方がよいと茶樹に覆いをかけた。現在でも

アッサムの茶園ではシェイド・ツリー（日陰樹）が植えられ独特の風景をつくっている。

ゴードンが中国から連れ帰った技術者がブルースの許へ送られてきた。1836年、ブルースはカルカッタへ紅茶サンプルを送った。総督オークランド卿はよい品質だとの声明を出した。

1839年1月、アッサム紅茶8箱がロンドン・ティー・オークションに登場した。指値を大きく上廻りキャプテン・ピディングが全量を落札した。アッサム紅茶の人気は高かった。

早速カルカッタとロンドンでアッサム紅茶栽培の会社が結成され、5月に両社は合併して「アッサム株式会社」としてスタートした。

一方アッサムの政治情勢を安定させるためにイギリス政庁は現地人による支配を剥奪して直接統治に切り換えた。

アッサムの土地を追われた住民たちはイギリス人に抵抗するが失敗に終わり、同族が住むビルマのフーコン・バレーへ移っていった。

1840年にインド政庁はアッサム会社の実験農場の2/3を10年間無料で貸与した。ブルースは北部の責任者として会社に参加した。

会社は労働力の確保に苦勞した。インド亜大陸の南端に住むタミール族を労働力として移住させた。アッサムは一面ジャングルで高温多雨のためにヨーロッパ人をはじめ病死する者が相次いだ。それにビルマ領であったのを戦争でインド領としたのでビルマ人の反攻もあった。

アッサム会社は成果が一向に上らず解散の危機に瀕したが立ち直り、52年に初めて配当を行い、続く10年間で驚くべき発展をとげた。アッサムの茶産業は軌道に乗った。

ダージリンでは1856年から中国種の茶樹で栽培が始まった。2000メートルの高地と深い谷の急斜面に植えられた香り立ちのよい中国種の茶樹が、絶えず霧につつまれて独特の高いフレーバーをもつ紅茶となった。

南インドのニルギリ山系では1861年に中国種の茶樹で栽培が始まった。

1860年までにインド茶業は健全な発展を遂げたが、「ティーマニア」と呼ばれた投機家が参入してきて、カルカッタで毎日のように会社が誕生し、株式を市場に流し込みバブルが起きた。架空の茶園や土地が売買され、古い畑がた

らい回しされた。65年にバブルは弾けパニックとなった。政府が乗り出して1870年頃には信用が回復した。

松下智『アッサム紅茶文化史』雄山閣、2001年

紅茶の生産ーセイロン

セイロン島は東西交通の要衝であり、高級スパイス・シナモンの産地でもあった。

ポルトガルは1658年にいち早くこの島の沿岸主要地を支配した。

1796年にオランダが現地のキャンディ王国と組んでポルトガル勢力を追い出した。オランダは米作を奨励し、南部の山間部ではコーヒー栽培に成功した。

1796年にオランダ本国がナポレオンのフランスに占領されると、フランスと敵対していたイギリスは1802年にインドから軍隊を派遣してコロンプを占領した。1815年にはキャンディ王国の内紛に乗じて全島を植民地とし総督をおき、農地をイギリス人入植者に安く提供した。

1823年、総督はコーヒー農場を開設した。1835年頃から中南米諸国では奴隷解放の結果、コーヒーの供給力が低下し、世界的にコーヒー需要が逼迫していた。

セイロン在住のヨーロッパ人に土地が払い下げられた。彼らはそれを新しくやってきたイギリス人移民に3～4倍で転売した。総督から聖職者までが土地売買に走り暴利を貪り、南部地方はイギリス人の所有となった。

南部の山間部ではコーヒー栽培が順調に発展し輸出量も増えていた。ところが1869年にコーヒー園にサビ病が発生して各エステートに波及、77～78年にコーヒー樹は全滅した。

その後地にマラリアの特効薬のキニーネや茶樹の栽培が試みられた。キニーネは価格の下落で採算割れとなった。そこでセイロンの茶業が本格化することになる。

「セイロン紅茶の父」と呼ばれるジェームズ・ティラーは16歳でイギリスからこの島にやってきてコーヒー園で働きながら紅茶の製造を研究していた。彼のところからアッサム種と中国種の交配種の茶樹が供給された。

セイロン紅茶が初めてロンドン・ティー・

オークションに登場したのは1878年で、40年前のアッサム紅茶のときのようなセンセーションは起こらなかったが、セイロン紅茶は商業的基盤を築いた。

紅茶の生産ージャワ

1823年、バタビアの植物園長は日本にいるオランダ商館の医師シーボルトに茶の種子を送るように依頼した。1826年に日本から茶の種子が到来して実験農場に移植された。

総督は本国から、土着の植物を栽培して植民地財政を立て直すよう指令されていた。そこで茶の大規模な実験農場が流刑地に開設された。

一方、茶鑑定エキスパートのジャコブソンが中国へ派遣された。彼は1827年から6回中国を訪れ、茶の産地、茶園の事情、製法などを知った。また茶の種子や苗木、栽培者や技術者、茶製造の道具などをジャワにもたらした。

1833年までに多くのパイオニアが茶栽培に取り組み、ジャコブソンは彼らにアドバイスした。ジャコブソンは15年間にわたってジャワでの茶栽培に没頭した。オランダ政府は彼を茶栽培の監督官に任命した。後年、彼はオランダ・ライオン十字賞を授与された。1845年にジャコブソンは『茶栽培と製造のハンドブック』『茶の分類と摘採』をバタビアで出版した。いずれも茶の技術書として先駆的なものだった。

ジャコブソンの指導によって茶栽培はジャワの西部と中部地方に急速に広がっていった。

1831年にオランダ国王にジャワ茶が献上された。1835年にはアムステルダム茶商にジャワから紅茶箱が届いたが、その品質はマーケットの要求に添わなかった。

ジャワ紅茶のアムステルダムでの売価はコストを30%も下回ったものだった。

ジャワでの茶産業の第2段階は個人企業によって62～65年に始まった。揺籃期の茶産業の損失は600万フローリンに達していた。総督府は損失をカバーするために力点をコーヒーに向けた。コーヒーは結構な利益を上げていた。茶とコーヒーの利害が激しく対立した。

1877年にジャワ紅茶がロンドン・オークションに上場された。評価はインド紅茶よりもはるかに劣った。イギリスがインドで紅茶栽培

に成功したことから72年にインドからアッサム種を移入して中国種との交配種を生みだし、ジャワ紅茶の評判は変わった。

第3段階ではコーヒー栽培が衰退期に入り、代わって茶産業が盛んになった。品種は改良され茶園は拡大され、ジャワ紅茶はジャワコーヒーと同じく世界に知られるようになった。1875～90年にジャワ紅茶は黄金時代を迎えた。